

---

# **兵士とメイドのある悩み そしていつか二人は知り合うのです**

満月氷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

兵士とメイドのある悩み そしていつか一人は知り合ひのです

### 【Zコード】

Z3791S

### 【作者名】

満月氷

### 【あらすじ】

ある国ある城にいる女装姿の美形秀才王子の兵士と、数日後に彼に嫁ぐ婚約者の可愛らしい男装姫に仕え始めたメイドの悩み。

ある時ある国のある兵士達はある悩みを抱えていた。

その国には王子がいる。

ルトグヴァナー、通称ルーク王子は19にして國を動かせるほどの大変賢い王子だ。頭脳明晰、品行方正、容姿端麗と完璧な人柄のために國民からも親しまれている。

先日も婚約者である17の美しい姫君、ファティナ王女が城にやってきた。

近日中には婚儀に入る予定だ。

まだ早すぎるかもしねだが、お互いが望んでいてなおかつあの完璧王子だからいいだろ？、と上方で交わされたのだった。

冒頭にも言つたが兵士達はある悩みを抱えていた。

王子は頭がいい。力も整つており、紳士的で優しく、腕前も強く、気配りもでき、仕事も早い。当然花嫁候補は限りなくいるのだが彼はファティナ王女にそつこんだ。

完璧王子。

あれで、……………女装をしていなければなあ。

姿が女性なので男集の中に交ざつているとやり辛いことこのうえない。

ある時ある国のメイド達はある悩みを抱えていた。

先日、他国から嫁いできた王女様がいる。 正式にはまだ王妃にはなつていながら決まつたも同然。

ファティナ王女はとても美しい姫君だ。 下の者にも分け隔てなく話しかけ、物腰柔らかく、優しくて綺麗で、一緒にいれば温かくなるような女性。

国民にはまだその姿をさらじらことはないのだが、城内ではみなが彼女を慕っているのだから何の心配もない。 国民もすぐに馴染むであろう。

「かの王子にして、かの王女あり」

……いい意味での見出しが見えてきそうだ。

まさに素敵な王女。

先にも言つたが、メイド達はある悩みを抱えていた。

あれで、……………男装をしていなければなあ。

おかげでせつかく新しく迎えるお姫様なのに綺麗におめかしもせてももらえないなんて……。

\* \* \* \* \*

王子は時間がなくとも毎日稽古は絶対にかかさない。今日もしなやかにかつ力強く素振りを何百と続ける。

……やはり女性の姿で。

稽古なので簡易的に涼しそうなドレスだがそれでも女装にかわりない。

以前王子に尋ねたことがある。そのお姿で稽古は不自由しないのですか、と。

すると王子は、

『かつての英雄にドレスを身につけたまま敵大将をうちとった女性がいたらしい。なんでも裾さえ踏まなければそのほうが動きやすかつたらしいんだ。ならば男の私にはどうなのだらうね。それをためしたい』

でもその姿では、なんというか、味方としても頼りなくみえてしまう。

『そのほうがいいことは好都合だよ。敵の油断を誘える』

「ルーク様、お茶会!」

「… ハア ティナヘビウムリス…」

しばらくすると我らの次期王妃であるハアティナ王女様が稽古場に  
いらっしゃった。

……やはり男性の姿で。

いつの間にかお茶会の時間になつたらしくルーク王子をお誘いに現  
れたらしきのだがそれはメイドの仕事だ。

「口々に頼んでもよかつたんですけど…、私が早くルーク様にお会いしたくて、代わつてもらつたんです。でも…、お忙しいのなら今日はいいのです…」

「待つてファティナ、誰が忙しいなんて言つたの。たとえどんなに忙しくても、愛しいファティナとの大切な時間を失わせるわけがないじゃない」

それを聞いて嬉しそうな顔にかわつた王女に王子も「満悦。だが、忙しくないとは王子は言つていない。

このあとルーク王子は職務室でかなり多忙の予定だが、それでも王女との時間がなくなるのがどうしても嫌なのだろう。後で大変忙しくなるとわかついても愛しい人との大切な時間だけは。

…私もそろそろ妻を迎えるべきだな。お一人をみているとそんな気分になつてしまつ。

だが、せめて一人のご婚礼がすんで一段落してからにしよう。

まったく、悩みが増えるばかりだ。

そうだな…例えば俺と同じことを考える人ととかだ…、いるのならばな。

「じゃあちよつと着替えてくるから待つててね。これ以上こんな汗くさい姿でファティナの目を汚すわけにはいかないからね」

「……それでも、素敵と想うわたしはおかしいのでしょうか…？」

その王女の小僧なつぶやきを耳にとひれた王子。またやうに何か甘く喋るうとなれる。

早く行きなさいルーク王子。

「これ以上もたもたしてるとお茶会の時間が減りますよ」

「それはだめだつ！」

その後一、二話した後、王女は行つてしまわれた。

王子はドレスであるにもかかわらず走りだし、そしてなぜか急に立ち止まつた。

「やうだ、ヴァゼル！お前に新しい剣を新調しておいた。お前好みに使いやすいようにしておいたから後で試して、意見を聞かせてくれ。不具合があつたのならそれを直そう

王子には女装以外にもつべづべ驚かされる。

私の名前を知っているとは思わなかつた。もしやあの方は部下全員の名前を覚えて下さつていいのだろうか。

それに俺の剣はこの前折れてしまったのだ。見たのは数人で誰もが王子と話す間柄ではないので、きっと遠くから見ていたのかもしれない。

仕方ないから新たに用意しようつと思っていた矢先になんと王子直々に用意してくださったとは。

王子のやうに口を本当に舌を巻く。

\* \* \* \* \*

「さつもの時はヴァゼルとこうただけど、あこつまこつか凄腕になるよ」

「やうなのですか？」

「うん。一度だけ遠くから見たんだけどあの剣筋はみたことないから自己流だね。それもいい筋だった。もつゞし鍛えたら手合わせてみたいな」

「まあ、ではその時になつたらお呼びくださいね。私もみてみたいですね」

「いやだよ、僕が負けるといひを見せたらカッ「悪いじゃないか」

「その時はぜひ私が治療させてもらいますね。それに、…負けるルーク様もきっとかっこいいです」

「ファティナ…」

…私たちの存在を忘れて一人の世界です。

はあ…。せつかくのお茶会、毎日の安らかな時間。それなのにファティナ様をめかすことができないとは…。

以前王女様にお願いしました。ドレスで着飾らせてください…、と。

すると王女様は、

『「めんなさい…、式典のとき以外は出来るだけこのままがいいの。ルーク様が女性のお姿をするのには何か大切なわけがあると思うの。私はまだ聞く勇気はないけど…、でも、せめてこの姿で、ルーク様を安心させたいの。私はあなたの味方です、って。だから、ご

めんなれこ……』

…そこまで言われては無理矢理することはできないではないですか。  
…ならば、せめてドレス以外の他のところはござらせていただきま  
すよ。

『あつがとひ

そんな可愛らしい顔と声で言わないでくださいよ、まつたく。

「…でも、いつも言つてゐるけど、別に僕に会わせないでいいんだよ、  
ファティナ。女の子なのに髪を切つてまで男装しなくても…」

「…え…ル、ルーク様は、この姿はお嫌いでしたか？でしたら…」

「何言つてゐるの？男装でもこんなにも可愛いファティナを嫌いにな  
る方が難しいのに。むしろ僕だけに見える隠されたファティナの色

「氣にじぶんにかなりそうなくらいだよ。そりじゃなくて黙殺したらフ  
アティナは国に叱られちゃうじゃないか」

「それは、そうかもしだせんね。でも……」

「？」

「この姿をしますと、ルーク様と同じな氣分になれて、嬉しいん  
ですっ」

女装の王子に男装の王女。状況は同じなのがすゞしつれしじょうで  
す。

「ファティナ……」

「いつこう雰囲氣になるとルーク王子は姿は美しい女性なのになぜか  
急に男らしくみえる。

反対にファティナ王女は姿は素敵な男性なのになぜか急に女らしく  
見える。

不思議だわ……。

「口タ」

「はい」

「別の菓子が食べたい。それとグルミン茶も急に飲みたくなつた。何時間かかってもいいから全員で（・・・）準備して来てくれ」

「…まつたく。率直に「ででいけ」なり「一入きりになりたい」なりおっしゃればよろしいのに。」

王子なりの私たちへの気配りかしさ。

「かしこまりました」

もはや完璧に一人の世界。他の者はそれをほほえましく思いながら部屋を後にする。

最後の私が扉を閉めると同時に一人の恋愛モードは最高潮に。

「…だつて、扉を閉める一瞬、ほんの少しだけ何かが聞こえたんだもの。」

二人の仲むつまじさを見ると本当に羨ましくなつてるわ。  
でも我慢。一人の婚儀を終え、落ち着く日までの我慢よ。  
そうね…私と同じことを考えている人が良いわ、…いたのならね。

何人足りとも一人の邪魔はさせない。

それを壊しにくる者は我々が全て排除してみせる。

二人のためだけに。

さあ、今夜もやつてくる『外からのお客』を片付けなければ。

でも死んではいけない。

あの方は我々を覚えてくださるから、一人でもいなくなればすぐにわかってしまう。

あの方はとてもお優しいから私たちが死ねば嘆き悲しんでしまう。

そんな二人のために命をかけて、でも死なないで今日も勝つ。  
大好きな、二人のために…。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3791s/>

兵士とメイドのある悩み そしていつか二人は知り合うのです

2011年4月10日22時59分発行